

阿弥陀仏とその浄土

——和讃の諸問題——

金子 大 榮

「和讃の諸問題」という題なんではありますが、だいたい講義する和讃は、『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』と三部になっております。その三部には、それぞれの特徴がありまして、『浄土和讃』は言葉通り、浄土を讃嘆する和讃である、こう言ってよいわけであります。『高僧和讃』は七人の高僧が『三部経』の心をこのようさに解釈されたということを述べてあるのであります。そして『正像末和讃』の方は、そういうことに関わりなしに、宗祖親鸞聖人自身が言わずにおれないことを述べて讃仰しておられるのである。こういうことで、『浄土和讃』は言葉通り讃仰の感情、讃仰編と言ってよいであろう。『高僧和讃』は解釈、解釈編と言ってよいであろう。『正像末和讃』は表白、自分の心持ちを表白された、表白編であると、こう言ってよいであろう。こういうことで一応、三帖和讃の特徴をあげる事が出来ます。

そしてこの『浄土和讃』には、『讃阿弥陀仏偈和讃』『大経和讃』『観経和讃』『弥陀経和讃』『諸経和讃』『現世利益和讃』『大勢至和讃』とこう七つに分かれています。『高僧和讃』は、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空と七人一人一人述べてあります。『正像末和讃』の方は文字通り『正像末和讃』五八首の次に『疑惑和讃』というものがあり、その次に『皇太子聖徳奉讃』というものがあります。そして、諸問題といたしましたは、それぞれの和讃の

中から一つの問題を選んで、そしてその問題について考えたいということでありますが、しかし実際は、一つ一つの和讃の上において、どこにその和讃全体を押えんとする中心があるかということ明らかにして、それによって和讃というものは、大体こういうものであるかということをはっきりさせていきたいと思うのであります。ですから今日は、まず第一に『讚阿弥陀仏偈和讃』即ち四八首ですね。「弥陀成仏……」から「仏慧功德をほめしめて……」というところまであります四八首を貫いて、どういうことが一番問題になるのであろうかということが、今日の講義題目であります。題目をつけると「阿弥陀仏とその浄土」ということになりますか。

だいたい『讚阿弥陀仏偈和讃』というのは、曇鸞大師に、『讚阿弥陀仏偈』というものがありまして、その『讚阿弥陀仏偈』をいわば和訳されたものであります。これはまあ、『讚阿弥陀仏偈』というものに親しんでおられたんでしょうね。そしてそれを和訳してみたい。大体漢文で書いてあるのをそのまま読んでも親しみが湧きませんけれども、日本人は日本人として何か自分に親しみのある言葉で書き換えてみたいという要求もあり、そういうふうなことから和讃というものが出来たのでありましょう。

その『讚阿弥陀仏偈』というのは、曇鸞大師にあるのですが、それを和訳せられたんですが、その曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』というものは、『讚阿弥陀仏偈』としてですね、そうしてそこに「釈して無量寿と名く、経に傍えて讚じ奉る、又安養と曰ふ」とこれは曇鸞大師の原文にあるのであります。だから阿弥陀仏、そこへ南無阿弥陀仏と書いてあるのですが、その南無阿弥陀仏としるしてそして「釈して無量寿と名く」と。ここで阿弥陀仏と言うのは、無量寿仏と訳することになるのである。「経に傍えて讚じ奉る」、経は『大無量寿経』であります。『大無量寿経』に傍うて、そして『讚阿弥陀仏偈』を作ったのである。それでよいはずなのに、「亦安養と曰ふ」と。阿弥陀と言うことは又安養と言うことと同じことである。と言うことで、『讚阿弥陀仏偈』と言うことは、言葉通りに阿弥陀仏と言う、そういうふうな人格的なものと言いましようかね。仏様を讃嘆する和讃なのであるか。あるいは浄土。浄土の徳

を讃嘆する和讃であるのか。ということが、中心の問題としてよいわけであります。

この四八首を読んでいまずと言うと、確かに初めの方は阿弥陀仏のお徳を讃嘆してあるようではありますが、だんだん拝読してゆきますというと、阿弥陀仏のことを讃嘆してあるのか、それとも浄土のことを讃めてあるのか、それがよくわからないことになってきます。ということは、和讃に、その『讀阿弥陀仏偈』たらんものを抜き出されたんでしようが、和讃をひろうてみますというと、あるいは「大応供を帰命せよ」と言ったり、あるいは「畢竟依を帰命せよ」「本願功德聚を帰命せよ」「講堂道場礼すべし」「清浄勲を礼すべし」「清浄樂を帰命せよ」というふうなことで、帰命したり礼拝したりするものは、阿弥陀仏というものだけであるのか。それとも「講堂道場礼すべし」というてみたりね、あるいは「広大会を帰命せよ」と、こう言ってみますというと、仏を讃嘆するというよりは、むしろ浄土を讃嘆する。お浄土というものを讃嘆しておるものであるという感じがするわけであります。そしてそれらの言葉は、それらの言葉を和讃のはじめの方にひろい挙げてね、そして三十七の名前が挙げてあります。阿弥陀仏のことを無量光と言う、真実明と言う、無辺光と言う、平等覺と言う、そういうふうなことで功德蔵と言う、無極尊と言う、南無不可思議光と言うと。こういうふうな三十七の名前が挙げてあるのでありますが、その名前は、どうあっても仏の名前であると言うよりは、浄土の名前であるとする方が常識的であるのであります、だから『浄土和讃』だから、浄土のことを讃嘆した和讃としてさしつかえないのであります、しかしながら御左仮名というのがあります、左の方にみずからこの意味を解釈したのであります、その左訓。その左訓は御草稿の左訓と申しまして、和讃は草稿本と清書本が、……そういうことは専門的に研究している人に聞いて下さいませ。とにかく和讃には御草稿和讃と言うのと、それから今我々が読んでいる和讃とがあります。その御草稿和讃にはことに左仮名が多いのであります。そしてその左仮名にはかえって阿弥陀如来云々と書いてあるのです。どうも浄土のことであるのに左の方には阿弥陀如来と註釈されている。大応供でも広大会でも、皆左の方に阿弥陀如来とあってあります。浄土の名前であるべきはず

だのに阿弥陀如来などと、こう言っていることがどういうものであろうか。もっともこの御左仮名というものは、どこまで祖師がつけられたのか、それとも後の人がつけたのかということとはわからないのであります。わからないのですが、どうも祖師がつけられたものだけでなくて、後の人がつけたものもあるんだということが、文献研究者によって言われています。どうもそういうこともあるらしいね。

そこで、この『讃阿弥陀仏偈和讃』というのは、浄土そのものを讃美したものであると。それとも阿弥陀仏をほめたたえたものであると。或いは、阿弥陀仏というものと浄土というものを分けるということがそもそもこちらの分別であって、アミターと言えば、すぐ私たちは仏さんのことのように考えてしまう。もっと本来的なアミターと言う時には、むしろ場所的なものを考えたんじゃないだろうか。無辺ということですからね、アミターということは。限りなきものということをする時には、すぐ神様とか仏様とかというふうな、そういうふうなものを我々は考えておるのであろうか。それともそういうふうなものではないもっと広いものと言いますかね。もっと場所的なもの。我々の最初の宗教心というものをよびおこしたものは、かえってただ人とか法とかということではなくして、限りなきものということがある、それが、今度アミターということのもっている意味なのでないだろうか。或は、宗教感情としてでくるものは、阿弥陀仏というふうなものよりは、アミターという場所、場所といましようかね、阿弥陀仏という場所において、そこに感じられたものが阿弥陀仏なんであって、阿弥陀仏あるが故に浄土あるに非ず。浄土あるところそこに阿弥陀仏はいると、いうようなものがあるのでないだろうか。ということの問題としていいのでないかと思えます。

『教行信証』にしますればね、「真仏土巻」というのがある。「真仏土巻」では、光明無量、寿命無量の願というのを挙げて、そして、「真仏というのとは、これ不可思議光如来、真土というは、無量光明土なり」とこう言っておりま

す。これは無論、「仏というは、これ無量光明なり。土というは、不可思議土なり」とこれでいいわけなんです。こ

れていいわけなんですけれども、しかし、祖師の言葉使いには、かなり厳密なものがありまして、仏の時には不可思議光如来、とこういうふうに言い、そして土の時には、無量光明土というてありまして、そして光明無量の願、寿命無量の願によって、そこに真仏土というものがあるのですからして、その御解釈から言えば、真仏と真土と分けて説明してありますから、一応真仏と真土を分けなければならぬのでありましょうけれども、或は「真仏土巻」で化身土は化土でなくて、化身土という、化身土に対して真仏土にかかわって、したがって「真仏土巻」というのは、仏土の巻であってして、真仏と真土の巻であるというよりは、真の仏土の巻であると、こう了解するとなると、私は、同じことがですね、今の『讚阿弥陀仏偈和讃』においても感ぜられることなんでしょう。

そこでその言葉がどこにあるかしれませんが、『讚阿弥陀仏偈和讃』を読んで、いつも出てくるのは第何首目でありますか、

神力本願及満足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

真無量を帰命せよ

「真無量」という言葉があります。ただ無量と言わないで「真無量」と真の字をつけて、「真無量」という言葉で、何でもない言葉であるけれども、何故私がこういう言葉に引きつけられるかというと、実はそれは仏教ではなくて、一般の学問の上ですね、無限とは何ぞやということが、久松君の問いの通り哲学の上でも、殊に科学や数学の上に於きましても、無限とは何ぞやということが問題になっておるのであります。そして我々の考えておる無限というのは、兆の兆倍のまた兆倍というようなことを考えてね。そしてこう数えても数えてもきりが無い、数え尽くせないという、そういうものをこう無限と考えるのでありますけれども、しかしそれは数学の方では悪無限あるいは仮無限と

言っている。真に無量なるものというのはそれは数えきれんものというのではなくて、あらゆる数をその中に収めているのであって、だからして数え切れないというのは悪い無限であって、真に無限なるものは、それはどれほど数えきれんでも、なおかつそれを包むものという、こういうふうじゃなくてはならないと、こういうことを言うております。

ここで真無限と仮無限というふうなことを考えるに際して、仏教の方では真無量という言葉があるということが、ここで無量というのをどう考えるかということは、数学や哲学の発表をかうという意味はこういうことでありまして、清沢満之先生の宗教哲学なんかを見ますというと、確かにそういうことを書いてですね、そして無限とは何であるかということをお明らかにしておられるのであります。しかし『浄土和讃』では真無量というてあることによってですね、その真無量というものをどこで言い表わしたかというと、そうすると

神力本願及満足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

真無量を帰命せよ

とそういうてあります。その真無量のところへ本願、本願というものをもって無量ということがわかるのであります。が、しかしその本願とは一体何であるのか、本願ということは、浄土なしには本願というのはありえないのです。少なくともこの浄土、まず浄土というものがあって、そうしてそこに衆生も往生し、仏もそこで仏になることが出来る。浄土あって衆生往生ということがある、衆生往生ということがなければ我も仏にならないというのが本願ですからね。だから衆生往生のないところに仏の世界はないのであります。仏が仏になる場所。仏が仏になる場所は衆生もそこへ行く場所、これが本願でありますから。本願ということは浄土を予想しないでは成り立たない。だから、お念仏とい

うのは、浄土を願うという意味をもっておるのであります。浄土へ往生するという意味をもたなければ念仏でありえないのである。だから仏も、仏のあるところに、浄土ありではないか。仏様のおられるところは浄土なんだろう、そういうわけにいかない。仏も浄土においてはじめて仏になることが出来る。とにかくそういうふうな意味におきまして、この『讃阿弥陀仏偈和讃』においては、浄土の徳を備えているということにおきまして中味は浄土である。しかし御左仮名には阿弥陀と註釈している。

そこでその浄土というものをいかにして認識するかということでもあります。それには二つの方法がある。一つは自覚の展開。仏教は覚りの法でありますからして、覚りは自覚覚他といえますけれども、覚他も自覚から出て来るのでありますからして、したがって、自覚。仏教は自覚の法である。その自覚というものを展開していけば、そこに自ずから浄土というものが考えられなきゃならぬという、そういう一つの行き方があります。これは私が初めにこの学校の教壇に立ちました時に、天親菩薩の『浄土論』を講義し、そして『彼岸の世界』という書物を書いたんですが、あの頃のことを思えば、そしてあの頃の私たちの先輩や他の先生方が一人一人の先生がどういうことを言われたかということをお思い出す。そうするとその時分は、我ということが大きな問題になった。天親菩薩の『願生偈』には「世尊我一心に」と。「我」がありますね。それから「尽十方無碍光如来に帰命す」と、「如来」がありますね。そして「安楽国に往生せん」と「浄土」がありますね。「我」と「如来」と「浄土」という三つの着眼点があります。そこで我々は一体どこから手をつけるべきであるかと。私の様に、さて今の人もそうだろうと思いますが、浄土というのは分からない。しかも浄土というのは、あるのかないのかそれすらわからない。だから浄土がわからなくても如来さえわかればいいのでないかという、こういう考え方が出てくる。如来のあるところ、即ち浄土なり。まあ仏に帰依するということが大事なんである。念仏。仏に帰依するということが大事なんであって、まあ仏様ということさえわかったならば、そうしたら仏様のおいでになるところは浄土ではないかと。随分お偉い方でもそう言うておられた方も

あったし、私などもそういうふうに書いてみたこともあります。浄土中心でなくて如来中心でないか。仏様というもののさえわかれば、お浄土ということはこれ心配せんでもいいんじゃないか。如来があるところが浄土。そうすれば如来とは何であるか。如来とは何であるかというところ、浄土の問題は如来をうつしてきたところに、何か近づいてきたような感じがしますね。浄土ではわからんけれども、如来というと、何か親様だとか何とかかんとかいうことで、そうしてこう仏心というもので。けれども何かもう一つこう如来というと先程申したように人格というようなことを言い出す、すると結局「我」とは何ぞやというところへ来る。「我」とは何ぞやというところへきて、そうして「我」というようなものは、佐々木月樵さんの話を聞いた時には、Iである、Iはmyとmeと、こういうように言葉が変化してくる。なかなかおもしろい話でした。Iはmyとなる。Iをmyと。そうしますというと、すべてはmy私の世界である。私の世界であるということにおいて、世界であり人々であり、みんな私の私のと、myとしてみるところに聖道自力の立場があるのである。そういうのではなく私の為にあるのだと、me、meを中心としてみていくところに浄土教というものがあるのだと、いうお話でありました。なかなかおもしろい話ではありませんかね。すべてはこう何もかも親鸞一人がためであると。一切合切自分のためであると。Iをmyであらわすところに、そこにこう聖道自力の立場があり、meであらわすところに浄土教がある、というようなお話も思い出すのであります。

曾我先生の言葉にも思い出すのであります。曾我先生がどこかでお話された。我あり、我なし、我とならんという。我というのは、あると言うけれどもあると我々は言い張ることは出来ない。むしろ本当の我々に関わることなしと、自分が自分だと言えるようなものが何かあるか。我ありという、我ありという言葉が背後にありながら、しかも現実是我なしと言わなければならないところに、我とならんというものが出てくると。どこかに書いてありますから読んでいただいてもいいんであります。

しかしこんな話を言いはじめましたのはね、西洋の考え方、現代人の考え方もそうなんではないでしょうかね。実存

哲学というようなものは読んでみたことがないんだから、まあわからんかもしれませんが、しかし実存哲学には神に連なる実存主義と、神を無視する実存哲学というのがあるということでありますが、そしてあらゆるものは存在であるが、実存するものは我であると。我は、誰でしたか「寛存」という言葉を使っておる。我を我と自覚しておるという。我を我ということを知覚しておるという、そこに実存というのがあるとするればそこから出発しようではないか。「我思う、故に我あり」というようなことですね。その我というものをどこで見出していかうかということとは神様も死んでしもうたんだし、もうたのむべきものはここに我がおるということである。従って我とは何であるということをはっきりと明らかにすることからものを見出していかねばならんということであって、或は現代の人が、宗教を求めているとすればそこらあたりから来ているのであるということも言えるようであります。

さてその我というものが何であるかといえ、我とは自己、自分が自分であるということを知っておるものであるのではなからうか。花は我が花であるとは、恐らく知っておらないのであらう。だから人間の我は、我は我なりと。

我は我なり。曾我先生の「我は我なり」と。我は我なりというところからこう行こうとするときに、そこにそのような自覚が出来るのであります、その自覚というものを形であらわしますれば、我は我を知るのですからね。

我、我を知る。だからして、知る我と知られる我があるはずであります。ある人がそれを公式で表わして、I see me. と。I、我、我を見る。I see me. と。I see me. というところに我というもののあり方がある。そういうことなん

であります。その場合に、Iの方が本当の我なのか、meの方が本当の我なのだろうかということに問題はなるでしょう。そうしますれば、我が我を見るんだからして、見られる我の方は、これはいわば過去で、本当の自己は見る我でなくちゃならないという考え方があるんでしょう。しかし見る我は見られるものにならない。それが我だとおさえてしまえば、meとなってしまう。どれほどmeが出てきても、そのmeは本当の我でなくて、Iこそ我でなくちゃならない、そのIというものに触れていこうというのが、これが禅宗であり、聖道門であると言っていいでしょうな。

我得仏なんだからね。見たものは覺者なんだからね。Iはyouを見たんであって、だから見たものはIでなくちゃならん。見たものは仏であって、見られたものは衆生であるに違いない。だからして我得仏である。仏とは誰であるか。自分でないか。しいて言えば、本当の自分だと。そこで大我というような言葉を使ってみたり。あるいは真我という言葉も使ってみたり。仏教でもインドの論書なんかを見ますと、勝我という言葉を使ってみたりね、時によると大我という言葉を使ってみたりするような場所もありますのであります。

だが宗祖は、そういう言葉は嫌いであつたらしいですな。大我であろうが小我であろうが、我という言葉をはなれ、嫌われたようであります。けれども仏教全体としてそういう言葉を使つてはらんのかというと、そうでもなさそうであります。だから我得仏と。けれども我は、我を見るんだからね。見られた我も自分でないということは恐らく言えないでしょう。だからmeとして、Iがそれに覺するのであって、自覺するとは何であるかと言うと、meを發見することであると。こう言つていいのでなからうか。だから我とはむしろ見られるものの、meの上にあると、受け取る方が本当でないだらうか。こういうふうに見ると、そうすると他力の教えとはそういうところにある本當の自分というものは、見るものとしてではなくて、見られるものとしてのみ、自己というのは發見されるのではないだらうか。それがまあ我々の日常用語で申しますと「お天道様が見てござる」とかね。「お月様が見てござる」とか我々は教えられたものであります。まあ今はそういう言葉を使うか使わんか知りませんが。我々は見られておる。見られておるといふ時に見ておるといふより、もっと全面的に、本当の自分というものは、見られとるものとして、より見出すことが出来るのである。そういうふうに見られておる時に見るものとして仏を感じることが出来る。見られておるものなのであって。したがって見るものとしてこう仏を感じることが出来る。仏が分かればその仏の世界、即ち浄土である。これはもうずっとそれで推していけるのである。だからして仏あるところ浄土あるんで、或は我あるところ、そこに浄土がなくちゃならん。あるいは浄土をつくつていかならんという、そういうところで浄土がわ

からんかったら如来をわからしていこう。如来がわからんかったら自分というものを見ていこう、或は天親菩薩の唯識だ。唯識思想というのはそういうものから出てきたのであります。そしてそういうふうにく踏んでいく時にね、我々は、ただ信仰というのでなくして、本当にこう論理的に、理論的に如来を見、そして浄土を感じていくことが出来るのであります。

しかし何か私はそれと逆の方法があるように思えてならないんです。それは、私の講義を聞いて考えてくれたらいいことなんです。まず浄土あり、そして浄土に於いて仏あり。そしてそこに自分というものを見出すことが出来るのであると。こういういき方が、あるいは浄土教というものがそういうところから出てきたんじゃないかと思うのであります。人間にとってまず要求せられるものは、仏というようなものじゃなくて、浄土というものが、そういう場所的なのが、それがこの世界、人間の世界に生まれて、そして人生というものがどういうものかということを経験したものにとりましては、その救われる場所。人生というものを置いてみる場所、置いてみる所の場所的なのがありませんって、一番、原始的なものではないだろうか。先程も申しましたようにね、我々の無限という感じは、人間から来るか場所から来るかということも考えてもいいんでしょうね。廣大無辺であるか、悠久無辺であるかと、いうようなことは、ただこういう無限大なるもの。例えば現代でもインドは、アミターという言葉を使うんだそうですが。そういうふうなアミターという言葉はすばらしいものというふうな意味でね、大きな山へ登ってはアミターというようなことを言うそうですが、何かそういうふうな全てを包んでですね、そして全てはそれにのみよって成り立つもの。こういうことでその場所において我々は人生の終局をつくる事が出来る。そしてそこにおいて我々はそこへと招かれる。そこへと行こうとする、そこに仏の「来い」というのを感じるのであります。浄土あるが故に仏あるなり。仏あるが故に我あるなりと、こういうことが感じられるのであります。しかしこれは、或は行きつもどりつで、我↓如来↓浄土という方向をとりながら、同時にその裏づけが浄土↓如来↓我ということであるのであります。そう

いたしますればどちらが正しいかまちがっているとか言わないで、我々が無限という感情を養なわれておるのであります。それが『浄土和讃』において、そしてこの四八首の和讃において、どの和讃を読んでみても、特にはじめよりも終わりの方へいくに従って、浄土こそ人間が帰依するところである。

亡くなりました正親含英師は帰依という言葉と帰命という言葉とを分けて説明したことがあります。帰依するという言葉は場所的であるという。生の依るところは死の帰する所ですからね。帰命というのは仏様。命令、ですからね。それで、おぼしめしの名前というのは、帰命。帰命という言葉は、仏につくときには帰命。浄土につく時には帰依という言葉の方が相応しいようだと言いました。まあそうですね。そうですが、まあもう少し言えば帰依というのも帰命というのも、どちらもそう違いがないのでありまして、帰命は、運命をそこで托すんでありますから、浄土へ往く道というところに意味があるのでありましょう。

まあそこで今帰命という言葉が出たんでありますが。この四十八首の上においても少しはっきりさしておかねばならんことは、「帰命せよ」「帰命せよ」という言葉と、「なづけたり」というこの言葉とあります。帰命することと、なづけたりということとは、どうなんだろうね。話が批難になりますから、問題だけ残しておぎまして、これは、『阿弥陀経和讃』の時に言うことにいたしましょう。「なづけたり」。「撰取してすてざれば、阿弥陀となづけたまつる」という、「なづけたてまつる」というその心のはたらきが、帰命する。帰命するということとは、「なづけたてまつる」ことである。「なづけたてまつる」というのも帰命するということも同じことである。我々の心のはたらきとして結局同じことであるということに落ち着きたいと思うのであります。

しかし、それは第二の問題としまして、主要問題に帰りますというところ、こうして『浄土和讃』におきましては、阿弥陀仏に帰命することが、これが浄土へ往生を願うということである。従って浄土というものと阿弥陀仏というのは分け得ない。『讃阿弥陀仏偈』、「亦安養という」とあるから、傍らに浄土を誉めるようでありますけれども、

中身を読んでみると、文字通り『浄土和讃』で浄土の徳を讃嘆されておること。始めの十二光くらは
ほやと
仏の誓いでありませけれども、

弥陀初会の聖衆は

算数のおよぶことぞなき

浄土をねがわんひとはみな

広大会を帰命せよ

というような言葉からね、だんだん拝読していくにしたがって、これは浄土の徳を讃嘆してあるということがわかるのであります。

さてここにひとつ諸君からも考えてもらわなきゃならん問題は、それは広く申しますと東洋、西洋の、ものの考え方の違いと言ってもいいと思うんでありますかね、有限と無限という言葉を使いまして、そうして、無限なるものに帰依し、無限なるものを思慕していくのが、それが本願念仏の教えであるということでもあります。どれほど話しても、話しはつきないことでありますね、しかし有限なるものと無限なるものとはどちらが尊重すべきかということになると、西洋の考え方は、いささか違うようであります。ギリシャ哲学を学んだ人に聞きますというと、ギリシャ人は無限よりは有限を尊重するんです、とはっきり言っていました。尤も、聖書の文化はギリシャから出たんですから、ギリシャの人の中には無限を尊ぶ人もあるにはあるんだそうであります。あるいはあるんだそうありますけれども、しかし大体の流れは、無限は悪なり。有限は善なり。善悪ということ、それは、無限なるものは、混沌としているものでわけのわからんものである。無限は、人間の知識の光の届かぬところである。それを限定して、無限は闇である。そういうふうに光を肯定するのが人間の知識というものであるからして、その知識によって、これはこうである。あれはああであると、こういうふうに明らかにしていくところに、そこに人間の知性というものがある。そ

ここに善はこう限定されたところにあるのであります。あまりよく勉強していないので、よくは分からないのであります。しかしそういうことは確かにあるようであります。

早い話がありがとうというような言葉でも、Iとyouとを限定しなければ話が出て来ない。日本人は、Iだのyouだの出さんでありがとうが出てくるのである。どちらの方が次元的に高いかと言えば、日本人に言わすればありがとうの方が次元的に高い。Iだのyouだのというのは、ありがとうというものに包まれてあるのであります。そうじゃなくちゃならない。それで、仏教が分かるのである。施しても、私がこれをあなたに施したというようなことであつては本当の施しにならない。物を施しても、「私が、このものを、あの人に」という、我と物と、あなたという、この三つに執着しつては本当の檀波羅密にならない。檀であつても波羅密にならない。檀波羅密というのは、われらの物のだのそういうことを忘れて、もしそういうことを言いたいならば施したのは、その人の所有物を返したのだというくらいでなくちゃならない。もらう方がもつと大事なんです。もらう方も思に着くというのではなくして、そしてありがたいという感情を、今度は他の人に、わしもありがたかつたのだから、皆も喜ぶに違いないということで、そういうことで波羅密ということが広がっていくのである。だから、ありがとうということによって良い空気が伝わっていくのであります。

でもむこうの方の人はそれではしまりが悪い。やっぱりIとyouでなくちゃならん。なんでもないことのように思っていますけれども、外国人と話してみるとちよつとわからない。外国へ行つて旅行して帰つて来た日本人は、それにかぶれてきて、どうも日本語はいまいである。むこうは、はっきりしていると感心しますわね。私も旅行すると、そうなるかも知らんけど。でも何か嫌なことです。そういうことでなしには。ありがたいということはありがたいことだけで満腹して、そうして、そこにまた、その喜びも伝わっていくことになる、さらには本当に、仏教的なのでしょうね。しかし、それではしまりがつかんということを言うと、それではその人の言うことも考えて

みなけりやならん。東西文化がどこまで手をとり合うかということになれば、無限を尊重する。純粹感情的な帰依と。それから物を限定していくことも喜ぶところの西洋流の考え方。というようなことですね。それがね、一切のことにこう通ずるんであります。

自然と人間というようなことでもそうでしょうね。西洋の人は、人間中心でいこうと。今朝も小さい庭をながめながらお茶を飲んで、こういうことを思うたんだね。どうも仏教のお浄土は、植物性やねえ。

宝林宝樹微妙音

自然清和の伎楽にて

哀婉雅亮すぐれたり

清浄楽を歸命せよ

「七宝の宝池いさぎよく、八功德水みちみてり」ということでね、もう全部こう植物性であります。浄土が植物性というのはおかしいけど。浄土ということを想うと植物を想う。山水を想う。『阿弥陀経』だけは例外で、両方とも出しますけれどもね。けど『阿弥陀経』は出してみたものの、ちょっとまた考えてみて、「これ罪報の所生と思うべからず」とね。分別のはからいであるよね。あんなことでは、「鸚鵡・舍利・迦陵頻伽」というようなものを出してきたんですけれども、「鸚鵡・舍利・迦陵頻伽」まで出しましたけれども、……。

そこに西洋の天国と東洋の浄土の違いがあるかも知れませんが。一体浄土というものは何と言いましても人間の夢でしょうね。夢という言葉を使いますと、見果てぬ夢ということがありますね。それでこう、そういうふうを考えますと世論の宗教では浄土というのはどんなところであるかと言うのを研究するというのじゃなくて性格がわかるかもしれません。そこに天国と浄土の違いがあるのだろう。天国へ行くというと、たくさん人がおって、にぎやかにしているだろうし、仏教の浄土は寂靜でしょうね。おそらく『阿弥陀経』が分からないと同じように日本の思想という

ものは、これ又西洋には分らないでしょう。しかし寂滅という言葉によって与えられる人生というものそれが、あるいはそれがわからないなら仏教がわからなくなるのであると言っているであらう。マホメットでは、どうだ分からんけれども。ある宗教の極楽へ行きますと言うと、癖になる。酒池肉林で酒もあるし、それから牛肉もたくさんあるそうであります。こんなふうなことで、要するに人間の欲望を描いたものであると。欲望というふうなものではなくて、欲望を制した。欲望はたしかに人間の要求であります、その欲望を否定して、そして浄化して否定すると言っても、それを無くするのではなくて、それを清めて、それを純化して浄土ですからね。土を浄めるんだからして、土は人間の業によって出来たものであります。日本の国とは日本人の業であって、だから日本人というのはどんな性格かという、日本を旅行すれば分かるでしょう。国が清まる。国が南無阿弥陀仏によってま清る。それが純粹な感情によって清まるところが浄土なるが故に、そういう意味に於きまして、浄土というのは理想を持った、ということとは欲望の世界というものと理想の世界というものと分けていかなきゃならん。そういうふうなものが考えられるのでありましょうが、この話をいたしましたのは、宗祖は全ては、東洋的に関わっておられる。そして無限なるもの、という言葉だけでも、「真無量を帰命する」という言葉に何か引き付けられるものを感じるんです。そしてこれを思い合わせるものはこの自然である。「清風宝樹をふくときは」という様、こういう風な植物性なものが、植物というものが、人間の悪い炭酸ガスを吸って、いいのしてくるんでしょうね。だから浄土には植物があつて、同時に八功德水というものによって、浄土を説き表わそうといかにも、自ずからなるものでないかと思ふのであります。

しかしどこまでも人間を中心にして考えることになりますと言うと、やっぱりお浄土と聞くと、もっと人間臭いものが、満足出来ないようなものが、浄土で満足されることになるのであろうか。そこに、私は大きな問題があると思うのであります。それをどっかで、一つにすることが出来るのか出来ないものか、むこうの文化は行き詰って

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。

おるのでありますから、その行き詰まりを打開するものこそが本当の宗教的な浄土教でなきゃならないかと考えられるのであります。そういたしまして和讃の解釈をするということも、決して古いことを言うておるんじゃないかと、皆、我々の身近において、一体宗教とは何であるかという問題に対して、何かを教えるものであるということを考えていかなきゃならないんであります。まだだいたい考えなくちゃ、いろいろな問題が出てくるのでありますけれども、四十八首に於いて、まず問題となってくるものは、「阿弥陀仏とその浄土」ということであります。阿弥陀というものがずっと浄土に通ずるものであるということ明らかにしたものが四十八首であると、こう言っていると思います。

（本稿は、昭和四十五年五月十一日の大谷大学における講義「和讃の諸問題」の筆録である。文責 編集部）